



Title	古墳時代後半期における長頸鏃の規範の在り方
Author(s)	三好, 裕太郎
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 379-388
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105055
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古墳時代後半期における長頸鏃の規範の在り方

三 好 裕太郎

はじめに

古墳時代中期中葉から新たに出現する長頸鏃と呼ばれる長い頸部を有する鉄鏃は、その出現に朝鮮半島の影響があることが広く知られている。形状に高い規格性をもち、大小の古墳を問わず広く見られることから、当時の主要な武器の一つであったと考えられている。

しかし、長頸鏃の規格性の具体像にはまだ検討の余地が残る。そこで本稿では、近畿地域を中心として、古墳時代中期から後期における長頸鏃の法量に着目し、その規格性のあり方について検討する。

1. 研究史上の課題と本稿の視点

鉄鏃の研究史 鉄鏃の研究は、1930年代から今日まで不断なくすすめられており、これまで様々な視点から研究がなされてきた。なかでも、今日における鉄鏃研究の基礎となっているのは、後藤守一・末永雅雄両氏による分類方法である（後藤 1939、末永 1941）。前者による茎部の有無・鏃身部の形状からの分類と後者による鏃全体の形状からの分類の二つは現在でも有効と考えられ、広く用いられている。また、杉山秀宏による鉄鏃の全国的な集成と分類はそれまでの鉄鏃の研究を大きく進展させる画期となったと評価でき、全国的な鉄鏃の研究をおこなう基礎となった（杉山 1988）。

本稿で対象とする古墳時代中期から後期における鉄鏃の研究は、中期の編年研究として、中期では鈴木一有や水野敏典の研究があげられ（鈴木 2003a、水野 2003）、後期では鈴木や関義則や飯塚武司による研究があげられる（鈴木 2003b、関 1986、飯塚 1987）。また、水野によって古墳時代を通じての全国的な鉄鏃の編年がなされており（水野 2007）、鉄鏃の編年に関しての大枠はすでに完成しているといえよう。

地域性に関する研究としては、尾上元規や水野敏典の研究が挙げられる。尾上は西日本において古墳時代後期の長頸鏃と平根系鉄鏃の異なる型式のセット関係から地域性を抽出し、中央政権・鍛冶工房との関連を示した（尾上 1993）。水野は古墳時代前期から後期までを通じて列島内での地域性の発現過程を示し、背景に生産技術の普及をもとにした群集墳の台頭という社

会変化があるとした（水野 1995）。

編年と地域性の研究を基礎として中央と地域における鉄鏃の様相から様々な背景を読み取ろうとする試みがなされている。鈴木一有は、古墳時代中期における細根系鉄鏃のなかには中央が配布に強く関与したものと首長間交流の中で成立したものの2通りがあるとし、政治的紐帯を示す鉄鏃の存在を指摘する（鈴木 2003）。

こうした鉄鏃研究の中で、長頸鏃に関する研究もおこなわれてきた。長頸鏃の分類に関しては、様々な視点から検討がおこなわれている。西岡千絵は鉄鏃を鏃長と頸部長からの分析を通して、短頸鏃と長頸鏃の違いを明瞭にし、長頸鏃を他の鉄鏃と明確に分類した（西岡 2005）。法量に着目した研究では、水野は長頸鏃を法量の側面から分析し、関東における古墳時代後期の群集墳より出土した長頸鏃の計測から、軍事組織への武器の供給のあり方を想定している（水野 1993）。また平野隆之による高丸 10 号墳出土長頸鏃の検討は、型式ごとの特徴や生産時に鏃長を基準としていたことを示唆している（平野 2008）。

研究史上の課題 前節の研究史を踏まえると、鉄鏃の研究が編年や地域性に関する研究に集中していたということが挙げられる。なかでも編年の研究については、厚い研究史の積み重ねにもみられるように、古墳時代後期に至るまでの編年はほぼ完成している。しかし、長頸鏃の法量に焦点をあてた研究は多くはない。そこで本稿では、従来より指摘されてきた長頸鏃の規格性を、法量の側面から検討する必要がある。またそのうえで、長頸鏃の性格について検討し、その背景について考察していきたい。

2. 分析の対象と鉄鏃の分類

まず、本稿で対象とする資料は鉄鏃の中でも長頸鏃と呼ばれる一群である。部位名称は図 1 のとおりとし、まず、鉄鏃における長頸鏃の分類上の位置づけについて述べておく。

鉄鏃の分類基準としては、尾上や平林大樹の分類案（尾上 1993、平林 2013）を採用する。扁平で大型の鏃身を有する平根系と細身で小型の鏃身部を有する細根系という分類を第一とする。第 2 として頸部の長さにおいて短頸と長頸に分け、その後、第 3 として鏃身部の形状によって分類する。短頸と長頸の分類基準は、西岡千絵の基準（西岡 2005）に従い、TK216 期に導入がはじまり頸部長 6 cm 以上かつ鏃長約 10 cm 以上を有するものとする。

鏃身部の形状については多様な種類がみられるが、鉄鏃の先端部の片側のみに刃を造り出しているものを片刃とし、両刃の中でも側面の鏃身部が長く柳葉形を呈するものを柳葉として取り扱うこととする。なお、このほか鏃身部の平面系には、鏃の先端に山形の刃が付く圭頭や三角なども認められる。さらに、第 4 として鏃身部関の形状で分類をおこなう。鏃身部関は長頸鏃という小さな鏃身部を成形する上で意図的に作りだす必要があり、工人の意匠が反映さ

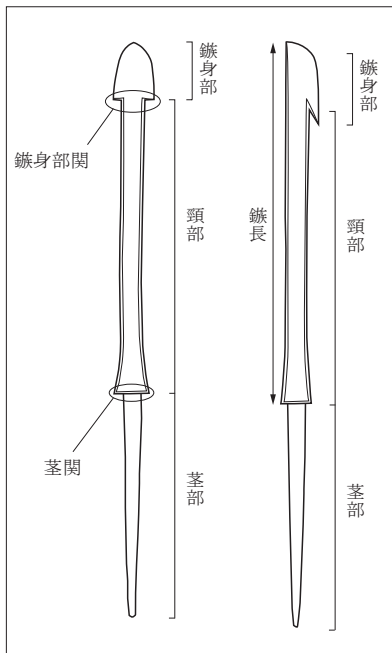


図1 鉄鏃の部位名称図と鏃長

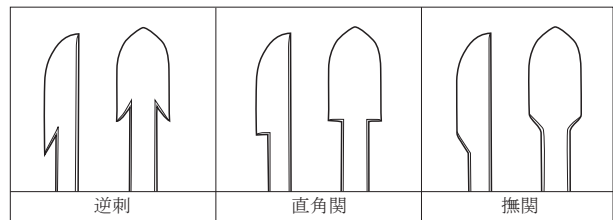


図2 鏃身部関の分類

れているといえる。そのため長頸鏃の生産と規格性を考える上で、鏃身部関の形状は考慮に入れるべきであろう。この関部の形状については杉山秀宏が分類を示しており、逆刺をもつ腸状・鏃身部と頸部が直角に繋がる直角関・鏃身部から頸部へ斜めにつながる斜関・鏃身部と頸部の境が緩くつながる撫関の4種類に分類した（杉山1988）。本稿では、杉山の分類をもとに関部の形状を逆刺・直角関・撫関とする（図2）。ただし、杉山の示す、斜関と撫関に関しては逆刺や直角関と比べて、工人の意匠が反映されているとは考えにくいため、この2つをまとめて撫関とする。

3. 長頸鏃の法量分析と単位

これまで、長頸鏃の「規格性の高さ」が研究史上でも指摘されてきた。この規格性に関しては全国的に極めて似通った形状で出土することもあり、その具体像については十分に検討されてこなかったといえる。そこで本節では長頸鏃の法量を計測し、その規格性について検討していきたい。

今回計測する長さとして鏃長を取り上げる。鉄鏃は矢を構成する一部品であり、矢として完成した時、鏃身部から頸部関までが表出するため、当該部分を示す鏃長は矢の長さを規定するうえでも重要な意味があったと考えられるからである。

法量を検討する鉄鏃の単位は、1古墳ごとを基本とするが、古墳に副葬された鉄鏃は生産から流通・保管・副葬（廃棄）の流れにおける最終段階を示している。その過程において、さまざま生産元からの集積があった可能性が十分に考えられる。ここで注意すべきは、鉄鏃が出土時に群（束）をなす場合があることだ。本稿で検討する規格性は生産時に規定されるものであるため、この鉄鏃群の扱いについて先に検討する。

例えば、後出7号墳では出土状況から鉄鏃がA～C群の3つの群に分かれている。図3は後

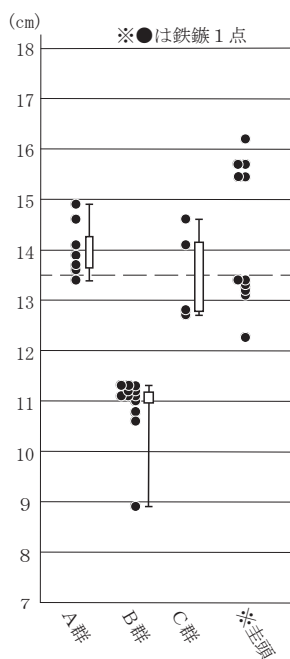


図3 後出7号墳出土
撫閑柳葉長頸鉄
の鏃長

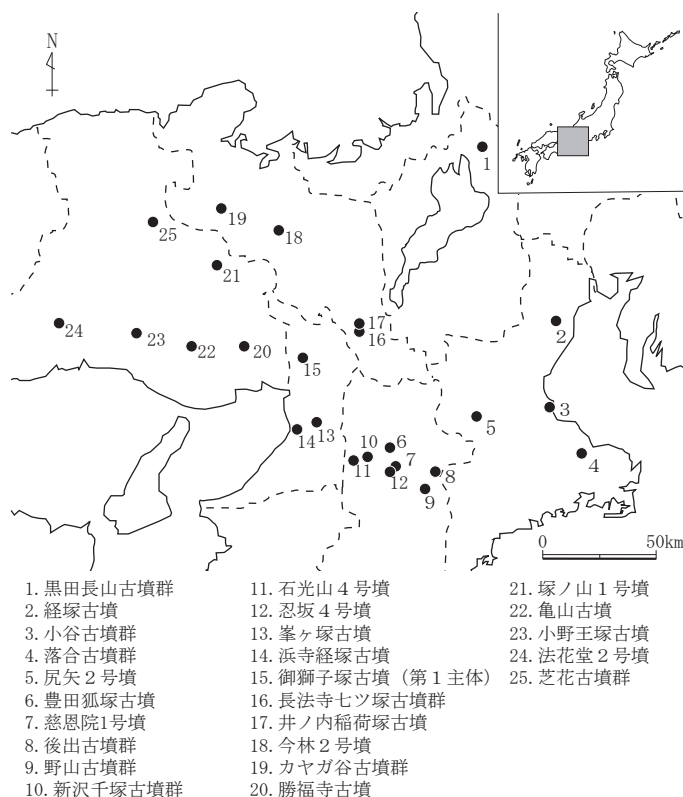


図4 対象遺跡図

出7号墳から出土した長頸鉄の鏃長を1点ずつのドットと箱ひげ図で併記したものである。グラフの箱部の上辺が鏃長の第3四分位、下辺が第2四分位を示し、両端のひげ部は鏃長の最小値と最大値を示す。

これらから出土している撫閑柳葉長頸鉄の鏃長をみると、8.8～14.9cmまでと長さに幅があるが、群ごとにみると、13.4～14.9cmを測り14.0cm前後にまとまるA群、10.6～11.4cmの長さにまとまるB群、資料数が少ないものの12.7～14.7cmと広い幅をもつC群と出土状況の示す鉄鏃群ごとに示す鏃長の中心域が異なる。特にB群のように同一型式の鏃長がまとまりを見せる鉄鏃群があることは、副葬時の鉄鏃群の単位の中に、矢の生産時から副葬に至るまで矢のセット関係が維持されている可能性があることを示唆する。

一つの古墳に副葬されている同一型式の鉄鏃であってもこのような様相を示すことから、1古墳の出土資料を一括して検討対象とするよりも、生産時の単位を維持している可能性のある鉄鏃群を最小単位として扱うほうが適切といえる。以下では、出土状況が鉄鏃群をなしている場合、鉄鏃群を分析の最小単位としてあつかう。その際のそれぞれの名称に関しては、報告書に従うものとする。また名称の設定がない場合は仮にアルファベット順で設定する。

ただし、図3の圭頭鏃のように鏃長分布の中心が鏃長 13.1 ～ 13.5 cm と鏃長 15.5 ～ 16.4 cm の2つに分けられる場合、箱ひげ図は両方の中心をまたぐ形で示されてしまうが、これは法量の規範が異なる2つの鉄鏃群からなるとみなすべきである。例えば鹿児島県神領10号墳の柳葉鏃では平面形は同じながらも鏃身部長約 11.5 cm の鉄鏃と約 10.0 cm の鉄鏃が見かけ上は同一の単位で出土したが、鉄鏃に残された革の付着痕から異なる盛矢具に納められていた可能性が高い。同一の型式であっても鏃長に明らかな分布の違いがある場合は、異なる鉄鏃群であったものが、見かけ上の鉄鏃群をなしている場合がある点には注意を要する。

なお、本稿の対象地域は近畿地域とする（図4）。

4. 長頸鏃の鏃長と型式

まず、長頸鏃の長さの変遷について確認しておく。川畑純は長頸鏃（長頸A・長頸B）の鏃長が 13.5 cm 以上のものを古相としている（川畑 2015）。鈴木一有は中4期以降の片刃長頸鏃を、鏃長（氏の鏃身長）12 ～ 15 cm 程度、10.5 ～ 11.5 cm 程度、10 cm 程度以下の3つの小様式に分類している（鈴木 2003a）。全体として鏃長の長いものから短いものへ変化する。ここでは、柳葉と片刃の両方を対象とするため、川畑の基準である 13.5 cm 以上の鏃長を基準とする。

図5・6は、柳葉長頸鏃と片刃長頸鏃の鏃長を古墳・鉄鏃群ごとに、箱ひげ図で示したものである。

柳葉長頸鏃（図5） まず、古相を示す鏃長 13.5 cm のものであるが、鉄鏃群内の個体差による鏃長のバラつきがあるため、ここでは鏃長の平均が 13.0 cm を超えるものを対象とする。この範囲の鉄鏃では、各古墳・鉄鏃群ごとに箱部の中心位置や幅が異なり、共通した要素を見いだせない。たとえば、法華堂2号墳のように鏃長が数mmの範囲に分布の中心をもつものや、後出7号墳C群撫開柳葉長頸鏃のように 1.5 cm 近い幅をもつものもある。

鏃長 13.0 cm 以下のものでも同様に共通した要素はなく、柳葉長頸鏃の時期差と鏃長のまとまり方の関係は薄いといえよう。

片刃長頸鏃（図6） 古相を示す鉄鏃の例は限られるが、鏃身部関の形状による箱部の位置の違いは認められない。しかし、各型式とも比較的鏃長がまとまり、いずれも 1.0 cm 以内に分布の中心がある。鏃長平均 13.0 cm 以下のものをみると、古層のものと同様に鏃長がまとまる古墳・鉄鏃群が多く確認できる。

ここで、柳葉長頸鏃と片刃長頸鏃の鏃長分布の差に着目する。表1は、本稿で対象とした古墳で、箱ひげ図の箱部の範囲、つまり鏃長分布の50%を占める第3四分位数と第2四分位数の差 0.2 cm ごとの古墳・鉄鏃群の数を示したものである。これをみると片刃長頸鏃は鏃長分布範囲が 0 ～ 0.2 cm までのものが最も多く、第3四分位数と第2四分位数の差 0.2 cm の差が大

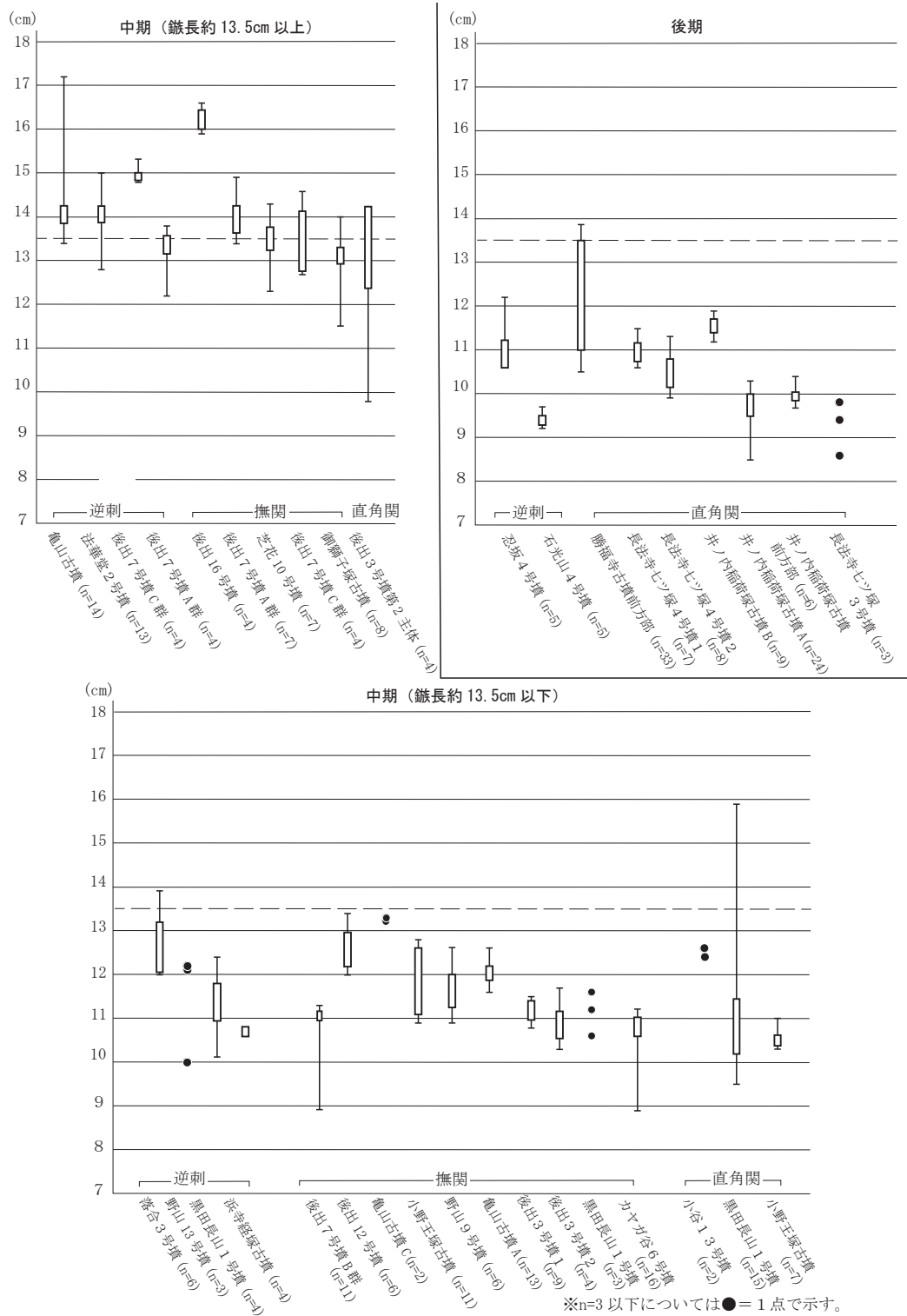


図5 柳葉形長頸鍬の鍬長

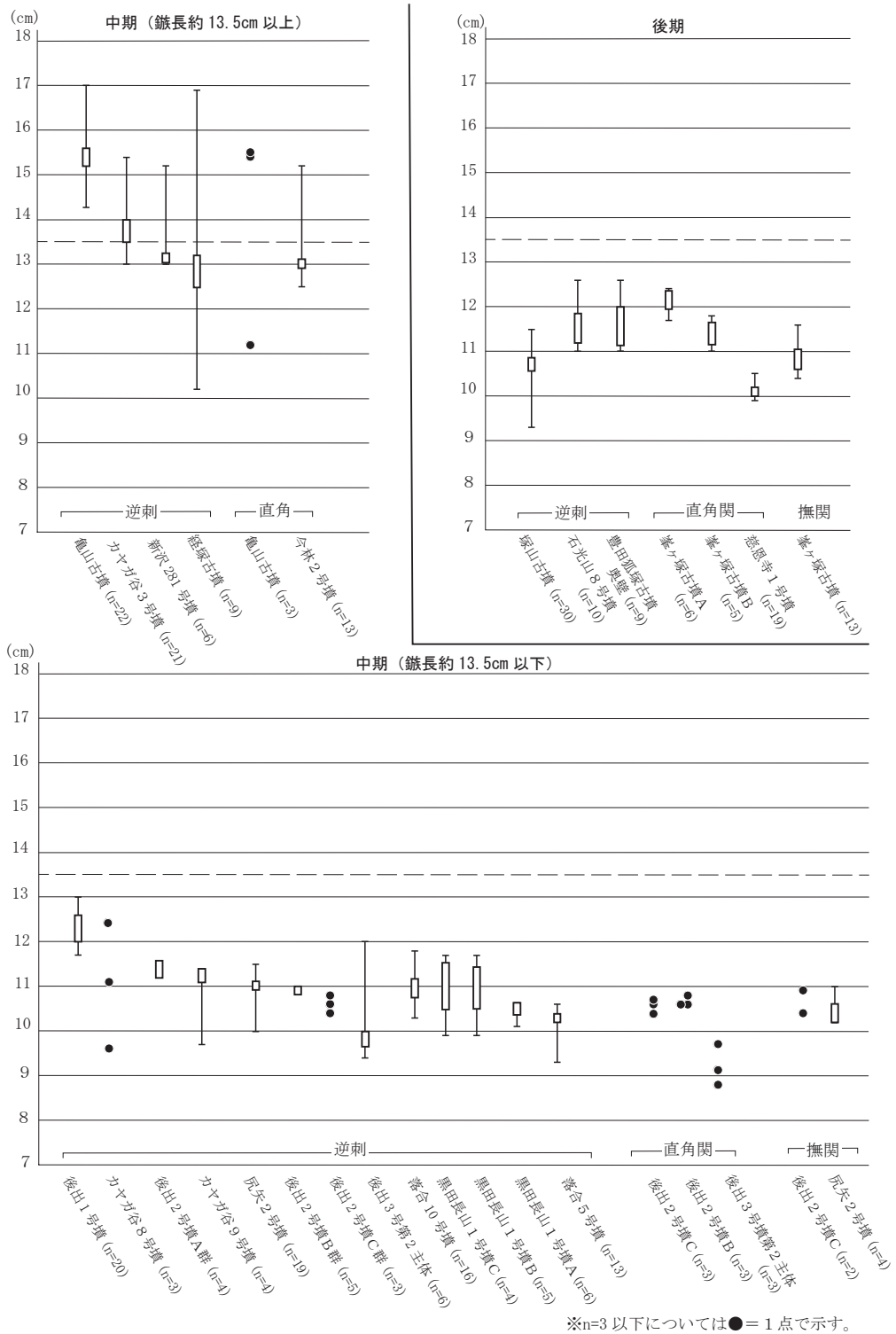


図6 片刃長頸鏃の鏃長

表1 鋸長ごとの分布の中心と古墳・鉄鋸群数

第2四分位数 -第3四分位数 (cm) 型式	<0.2	<0.4	<0.6	<0.8	<1.0	1.0≧
片刃長頸鋸	7	5	4	4	1	1
柳葉長頸鋸	3	5	3	5	1	5

※資料数3点以上の古墳・鉄鋸群が対象

きくなるほど例数が減少する。対して柳葉長頸鋸は鋸長分布範囲が0～0.2cmの規格性が高いものもあれば、1.0cmを超える例も複数あるという分散した様相

がみられる。

以上から、柳葉長頸鋸と片刃長頸鋸の鋸長のまとまり方は、時期や鋸身部関形状の型式差によるものではなく、柳葉か片刃かという鋸身部の大分類による可能性を指摘できる。特に鋸身部関ごとに共通性が見られないことから、規格という厳密なものでなく、規範の強弱の差というべきであろう。

古墳時代後期前葉の様相も確認しておく、資料数に心許なさはあるが、古墳時代後期の例をみると、柳葉形長頸鋸でも第3四分位数と第2四分位数の差が1.0cm以内に収まるものが多い。古墳時代中期と同様に箱部の中心位置は古墳・鉄鋸群ごとに異なり、地域一帯で共通する規格があるとは考え難い。

5. 鋸長の規範と鉄鋸生産

個々の鉄鋸の鋸長は、生産時に規定されるものと考えられる。そのため、柳葉・片刃間で鋸長のまとまりに差があることは、生産時から鋸身部形ごとに規範の強さに差があったと考えられる。

長頸鋸は須恵器型式でのTK216期以降、全国に急速に広がる型式で、列島内でそれをひろめた主体は中央政権とするのが妥当である。そうであるならば、長頸鋸の型式および鋸長の規範は中央政権が中心に発出したものと考えられよう。片刃長頸鋸は柳葉形長頸鋸と比べてその規範が強くみられ、生産に際して中央政権が強く関与していたと想定できる。しかし、鋸身部関といった細部の形状については、中央政権に膝下の近畿地域でも多様であり、生産時に一定の裁量はあったようである。これは、限られた工房もしくは工人集団のみが生産に携わっていたのではなく、個別の工房・工人集団で生産が行われていたためであろう。片刃の鋸身部は基本的に古墳時代中期以降に全国に広まる型式である。しかし点数が10点に満たない例が多く、本格的に普及するのは長頸鋸出現以降といえる。片刃長頸鋸の規範の強さは、長頸鋸の普及との関連を指摘できよう。

柳葉形長頸鋸は、各古墳や鉄鋸群ごとに鋸長の規範の順守度合いが異なる。古墳時代前期以来の鉄鋸の地域性を踏まえれば、鉄鋸が中央で一括された器物ではなく、各地で生産されてい

たことは明らかであり、柳葉長頸鏃のような様相が自然といえる。しかし、古墳時代後期には古墳・鉄鏃群ごとに鉄鏃の鏃長がまとまりをみせ、ばらつきが解消されていく様子は各鉄鏃生産における規範の強化といえよう。この時期は、古墳時代後期の鉄鏃の地域性の発現する時期である（尾上 1993）。須恵器などにみられる各地域への技術の拡散と同様に、鉄鏃のような金属製品についても、生産技術の地域移転にともない、規範が生産場所ごとで強化されたと考えられる。

おわりに

本稿では、鉄鏃の鏃長に着目して古墳時代中期後半に出現する長頸鏃の規格について検討した。その結果、古墳時代中期の間は、柳葉長頸鏃と片刃長頸鏃で鏃長の規範の強さが違い、中央政権が各地の鉄鏃生産に求める規範に違いがある可能性を指摘した。しかし、極端に長いもしくは短い鉄鏃の存在や片刃長頸鏃のみ規範が強い意味など残された課題も多い。今後の課題としたい。

謝 辞

本稿は平成 24 年に提出した卒業論文を大幅に改変したものある。卒業論文の作成にあたり、福永伸哉先生、高橋照彦先生、中久保辰夫先生からは懇切なご指導をいただいた。

また、次の機関からご協力を得た。記して感謝申し上げます。奈良県橿原考古学研究所、鈴鹿市考古博物館、豊中市教育委員会、羽曳野市教育委員会、福知山市教育委員会。

引用・参考文献

- 尾上元規 1993「古墳時代鉄鏃の地域性—長頸式鉄鏃出現以降の西日本を中心として—」『考古学研究』第 40 巻第 1 号 考古学研究会、岡山：pp. 61-85
- 尾上元規 1995「古墳時代後期における鉄鏃の地域性形成について—岡山県南部を例としてみた鉄器生産の画期—」『古代吉備』第 17 号 古代吉備研究会、岡山：pp. 105-115
- 川西宏幸 1990「儀仗の矢鏃—古墳時代開始論として—」『考古学雑誌』第 76 巻第 2 号、東京：pp. 36-62
- 川畑 純 2009「前・中 antiquity 古墳副葬鏃の変遷とその意義」『史林』第 92 巻第 2 号 史学研究会、京都：pp. 1-39
- 川畑 純 2010「古墳副葬矢鏃の生産・流通・保有・副葬」『古代学研究』第 185 号 古代学研究会、奈良：pp. 1-20
- 川畑 純 2015『武器が語る古代史—古墳時代社会の構造転換』京都大学学術出版、京都
- 後藤守一 1939「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』第 54 巻第 4 号 東京人類学会、東京：

pp. 133-161

末永雅雄 1941『日本上代の武器』弘文堂書房、東京

杉山秀宏 1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第8集 吉川弘文館、東京：
pp. 529-644

鈴木一有 2003a「中期古墳における副葬鏃の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集
岩田書院、東京：pp. 49-70

鈴木一有 2003b「後期古墳に副葬される特殊鉄鏃の系譜」『研究紀要』第10号 静岡県埋蔵文化財
調査研究所、静岡：pp. 217-236

鈴木一有 2018「副葬品組成からみた古墳時代中期から後期への変革」『待兼山考古学論集Ⅲ—大阪
大学考古学研究室30周年記念論集—』大阪大学考古学研究室、京都：pp. 475-496

関 義則 1986「古墳時代後期鉄鏃の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号 PHALANX—
古墳文化研究会一、神奈川：pp. 5-20

塚本敏夫 1998「生産モデルパターンについて」『中期古墳の展開と変革—5世紀における政治的・
社会的変化の具体相（1）—』埋蔵文化財研究会、大阪：pp. 11-14

豊島直博 2002「後期古墳出土鉄鏃の地域性と階層性」『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所、奈良：
pp. 85-96

西岡千絵 2005「計測値からみた短頸鏃と長頸鏃」『古文化談叢』第53号 九州古文化研究会、福岡：
pp. 47-61

橋本達也 2010「古墳時代中期甲冑の終焉とその評価—中期と後期を分かちもの—」『待兼山考古学
論集Ⅱ』大阪大学考古学研究室、京都：pp. 481-501

平野隆之 2008「4. 出土遺物の検討（2）鉄鏃—各部計測値からみた各類の特徴と型式学的位
置づけ—」『高丸・友田遺跡群』岡垣町文化財調査報告書第27集 岡垣町教育委員会、福岡：
pp. 224-227

平林大樹 2013「信濃における後期・終末期古墳副葬鏃の変遷」『物質文化』93号 物質文化研究会、
愛知：pp. 123-138

平林大樹 2014「信濃における後期・終末期古墳副葬鏃の生産と流通」『信濃』第66号第3号、長野：
pp. 15-34

松木武彦 2008『日本列島の戦争と初期国家形成』東京大学出版会、東京

水野敏典 1993「古墳時代後期の軍事組織と武器副葬—長頸鏃の形態変遷と計量の相関にみる武器供
給から—」『古代』第96号、東京：pp. 74-104

水野敏典 2003「古墳時代中期における鉄鏃の分類と編年」『橿原考古学研究所論集』第14 八木書店、
東京：pp. 255-276

水野敏典 2007「古墳時代鉄鏃研究の諸問題—東アジアの中の鉄鏃様式の展開—」『古代武器研究』
第8号 古代武器研究会、滋賀：pp. 39-51

水野敏典 2009『古墳時代鉄鏃の変遷にみる儀仗的武装の基礎的研究』奈良県立橿原考古学研究所、
奈良